



京大卒 芥川賞作家 平野啓一郎

『顔のない裸体たち』

芥川賞受賞作

『日蝕』

『あなたが、
いなかった、
あなた』

『一月物語』

『葬送』

『高瀬川』

『滴り落ちる
時計たちの波紋』

1975年 誕生
1994年 京大法学部入学
1999年 『日蝕』が第120
回芥川賞受賞
同年 京大法学部卒業
2008年 三島由紀夫賞の
選考委員に就任

京都大学在学中の私生活・読書生活や芥川賞受賞時の様子は？

僕は現役で大学に入りまして、大学は5年行きました。法学部だったんですが、多分今の方が厳しいと思います。〈あほうぐぶ〉と言われていた時代ですから、かなり時間が余っていました。東京なんかは遊ぶところもたくさんありますが、京都にいてもたいして遊ぶところはないですからね。自分で遊び方を工夫しないと退屈でしょうがないということで、音楽が盛んな時期だったので軽音サークルに所属してギターを弾いていました。アルバイトは百万遍にあったバーで1回生のころから3回生まで働いていました。

その一方で本を読んだり小説を書いたりということはしていました。4回生の終わりに原稿を出版社に投稿してそれがおもしろいということになり、そこから出版社とのやり取りが始まったんです。そうしてちょっと原稿料も入るようになり、そのまま就職せずに大学生活を終えました。当時はミステリー研究会などのサークルも有名でしたけれど接点がなく、文学部の友達もほとんどいなくて、自分で本を読んで小説を書いて、という感じ

でしたね。

恥ずかしい話、ほとんど学校に行かなかったの、いつも朝起きてなんとなく本を読んで……という生活でした。出身が北九州なんですが、実家の近所の書店とルネのラインナップとの落差にかなり驚きました。今どきの世の中ではこういうものが読まれているんだとショックを受けて、生協にはかなりせつせと通っていましたね。小説は好きでずっと読んでいたんですが、大学に入ってからどちらかというと人文社会系の本、現代思想とか宗教の本を読むようになりました。

学生時代に芥川賞を取ったのですが、作家デビューは4回生の終わり、賞を取ったのが5回生の終わりで、実質学校に行っていない時期でした。なので学校で騒がれたという実感はなかったです。大学でTV番組の取材が行われたときには、みんなにじろじろ見られていたけれども。

当時は就職超氷河期でした。そんな中で4回生になってもたいして就職活動もしていないので、真面目に司法試験の勉強をしている友達からは説教されたりしました。出版社とのやり取りが始まって

からは小説書いていることを公言していましたけれども、それまでは公言していませんでした。自称作家ってなんか格好悪いでしょ？ 出版社とのやり取りが始まって、やっと自分が就職活動をせず大学に籍を置き続けている言い訳ができました。それでも周囲からは「作家になってどうやって食っていくわけ？」みたいな反応は当然あって、賞をもらったのが一種のお墨付きになったというか、いちいち面倒くさく「作家でやっていきます」と人に説明しなくてよくなって気が楽でした。

芥川賞

新聞・雑誌に発表された純文学短編作品中、最も優秀な作品に与えられる賞。主に無名または新進作家が対象となる。

選考は年2回（上半期は7月、下半期は1月）行われる。直近の第138回受賞作品は、『乳と卵』(川上未映子著)。

京大卒の受賞者は平野氏の他に、井上靖氏（第22回）・高城修三氏（第78回）がいる。また、賞の設立者である菊池寛も京大卒である。

はみだし
すてーじ

生きている木の枝から枯れ葉が散っていくように、学生はキャンパスから姿を消していく。
⇒木の枝に芽吹く春待つ蕾は、また学生が集まる季節を待っているようである。

(法・2 日本史マスター)
(今年度もようやくおしまい；編)

芥川賞受賞作『日蝕』は、中世西欧が舞台の宗教色の強い個性的な作品ですが創作のきっかけは？

当時色々な理由があって宗教に関心があったのもありますし、世の中自体がオウム真理教の地下鉄サリン事件だとか阪神大震災だとかで、破滅的な出来事が色々起こっていて、そういう時代の雰囲気も結構影響したと思うんです。小説を書きたいという気持ち自体はずっと昔から強くあったんですけども、そういうテーマを選んだのは昔から〈生きるとか死ぬということはなんだろう？〉とか、〈自分ってなんだろう？〉みたいな自分なりの問いがあったからなんです。

▶ 処女作であり、芥川賞受賞作の『日蝕』。本作で平野氏は芥川賞最年少受賞者（当時）となった。



京大での学生生活は作品に関係していますか？

関係していると思いますね。『日蝕』は東京の文壇から外れた作品ですし、なぜ今ごろこんな作品を書いている新人がデビューしたのかと不思議に受け止められました。京都は〈東京＝日本の一極集中〉的な文化状況から、わかりやすい意味でオルタナティブになれる土地でしょう？ 歴史が長いとか、昔の都だったとか。世の中多様化していて脱中心化が一つのキーワードみたいになった時代なのに、カルチャーとか文学は東京中心に回っているという状況が根強く残っていました。そんな中で京都でものを書き始めたというのは一つの意味があったと思います。京都って西陣辺りの機屋さんなど伝統工芸みたいなものも残っていて、割とものを作っている人に理解があるというか、そっとしといてくれるような感じがある気がするんですよね。そういう意味では京都にいて良かったと思います。

平野氏オススメ作品

平野氏に自作品の中で特にオススメの作品を紹介していただきました。

先日エッセイ集と対談集を2作組みで出しましたので紹介します。

対談集『ディアログ』（講談社）は、僕が20代のころにいるんな人と対談した内容を収めています。一つ一つの内容を楽しむだけではなく、人と会って喋ることの面白さを知る意味でも手にとってもらえればと思います。



エッセイ集『モノローグ』（講談社）は、特に三島由紀夫について熱心に論じています。『金閣寺』という作品に力を入れて、なぜ三島がああいう最期（自衛隊駐屯地で自害）を迎えるに至ったかまで含めて議論していますので、関心のある方はぜひ読んでください。

作品中で注目して欲しい点は？

僕自身は1作品で僕という作家・考えていることを理解してもらいたいのではなくて、何作かの中で、行間じゃないですけど〈作品間〉みたいなところで、理解してもらいたいという思いが強いんですよ。そういうアーティストのタイプは結構いて、たとえば写真家は1枚というよりも写真集や展覧会のたくさんの写真の中でどういうことをやっているのかを理解してもらいますよね。

自分なりのテーマを根気強く色々な作品で色々な形で書いていきたい、というのが一つの僕のスタイルだと思うんです。「あの作家はこういう人間だ」と単純化して一面的に捉えがちですが、色々なテーマがあるというのを見てもらうのは、現代の複雑化した様々な局面に対応している人間の多様性を見ることになると思うんです。ややこしいものの集積として人間はあって、うまく統合されてないような矛盾をそのまま矛盾として受け取ってもらいたいという思いがあります。

これからの創作活動について

20代は『葬送』のような大長編か、割と実験的と評される短編を書いてきましたが、30代は少し短い500枚位の長編を書きたいと思っています。読者の存在が多様だということがネットの出現を通じて作者にはっきり見えてきた時代だと思うんです。漠然と抽象的な読者に向けて書くということが難しくなってきました。僕自身は自分の書いていることを一部の文学好きな人だけに理解してもらえればいいとは思っていません。そういうカルト的な作家になるという道もあると思いますけれど、数千人のためだけに小説書くというのが自分のやりたいことではないんです。スポーツ選手だと、たとえば高度なバッティング理論を身に付けて練習して技術が上がるほど素晴らしいヒットを打ってファンに近づいていきますが、文学はその世界で考えを深めて複雑になっていくほど読者と離れていってしまうというジレンマがあります。そこを何とか埋め合わせたい。自分が目配

りをして考えてきたことを特に文学に熱心ではない人にどうやって届けるかが課題の一つじゃないかと思っています。

京大生へのメッセージ

将来どうやって生きていくのか不安に思う時期だと思うんですよね。自分自身とじっくり対話する時間をこんなとれる時期は他にないですから、自分の適性をよく考えてほしいです。好きなことと適性が合致しないことはよくあると思いますが、僕の考えでは得意なことを一生の仕事にした方がいい気がしますね。得意な分野でうまくいくと他のジャンルでももしろいことをしている人達と接する機会が自ずとできて、そのたびに世界が広がっていきます。自分の人生は自分でしか責任を取れないですからね。そういう気持ちで頑張ってください。



——ありがとうございました。

はみだし
すてーじ

2008年、オリンピックを大阪に！
⇒全大阪府民が泣いた。

（法・1 病床のヨシム）
（そう、それは儚い夢……；編）